

診療の引き出しが増える



頻用漢方薬10の処方

田中博幸 著（曙クリニック院長／日本東洋医学会専門医）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDF だけでなくスマホ等でも読みやすい HTML 版も併せてご利用いただけます。

▶HTML 版のご利用に当たっては、PDF データダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から 3 営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することで HTML 版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶登録手続

漢方医学（総論） ————— p3

1. 証について ————— p3

2. 漢方の診察法 ————— p4

頻用10処方（解説） ————— p9

1. 葛根湯 体質の強いひと（実証）の風邪の代表処方 — p9

2. 小青竜湯 花粉症・アレルギー性鼻炎の代表処方 — p11

3. 六君子湯 機能性胃腸症の代表処方 ————— p12

4. 大建中湯 腸に由来する愁訴に対する代表処方 — p15

5. 補中益気湯 補剤の代表処方 ————— p16

6. 八味地黄丸 腎虚の代表処方 ————— p18

7. 五苓散 水毒の代表処方 ————— p20

8. 当帰芍薬散 瘀血と水毒のある虚弱女性の代表処方 — p22

9. 加味逍遙散 精神的愁訴の女性に対する代表処方 — p24

10. 抑肝散 焦燥感、易怒性に対する代表処方 ————— p26

▶HTML版を読む

日本医事新報社では、Web オリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

漢方の習熟度(目安)

「初級者」：ご自身の専門領域の患者さんに対して、病名投与に近い形で漢方薬を処方している先生（おおよそ10種類以内）

「上級者」：専門領域を中心に、漢方特有の診察法を用いて、陰陽虚実や気血水などの漢方所見も考慮して処方している先生（20～30種類）

「指導者」：幅広い領域において、漢方医学的な特徴（証、構成生薬、原典など）を理解して処方している先生

このコンテンツの狙い

- ▶ 漢方には特有の診察法とそれに基づく所見の分類がありますが、このコンテンツではその診察法のうち最も基本となるものについて動画で解説します。
- ▶ 代表的な漢方薬について、「初級者向け」と「上級者向け」に分けて説明します。
- ▶ 初級者向けの項では、病名投与から一步前進することを目標に、虚証実証のような簡単な漢方所見、構成生薬などに関連づけて解説します。
- ▶ 上級者向けの項では、症状や漢方所見をもとにした次の一手となる鑑別処方、類縁処方との使い分けなどを紹介します。
- ▶ その処方について、有効だったものや興味深い経過をたどった筆者の経験症例を適宜紹介します。
- ▶ 各項の最後に、その処方に関するマメ知識を「Dr.田中の一言メモ」としてコラム的にまとめましたので気楽にお読み下さい。

漢方医学（総論）

1. 証について

漢方の世界に足を踏み入れると、まずはじめに出会るのが「証」という言葉です。この証の考え方が、漢方の魅力、面白さにつながります。その一方で、現代医学的な説明が困難で非科学的である、診察法などの技術の修得が難しいといった理由で敬遠される要因ともなります。このコンテンツでは、漢方の敷居を低くし、まずは「漢方薬を使ってみよう」と思っただくことを目的に、漢方の用語、考え方について簡略化して説明することをお許し下さい。

証とは、病者にあってはからだに現れた徴候、症状で、医師にとっては治療の手がかりとなる証拠を意味します。つまり証とは、病者すなわち「薬を投与される側」の状態も十分に汲みとり考慮する概念です。現代医学が「薬を投与する側」の論理を中心としているのとは対照的と言えます。漢方では、証にしたがって治療する「随証治療」の姿勢が、治療の要諦として強調されています。証を考える上で、病者の側の視点が重視されていることが漢方の特色であり、治療学として優れている点と言えます。

漢方の現場では、証はいくつかの意味で使われます。

- ①症状
- ②「葛根湯の証」「五苓散の証」といった処方の適応
- ③虚証、実証など体質、体力の強弱（図1）
- ④腹証、脈証など治療の目標となる所見

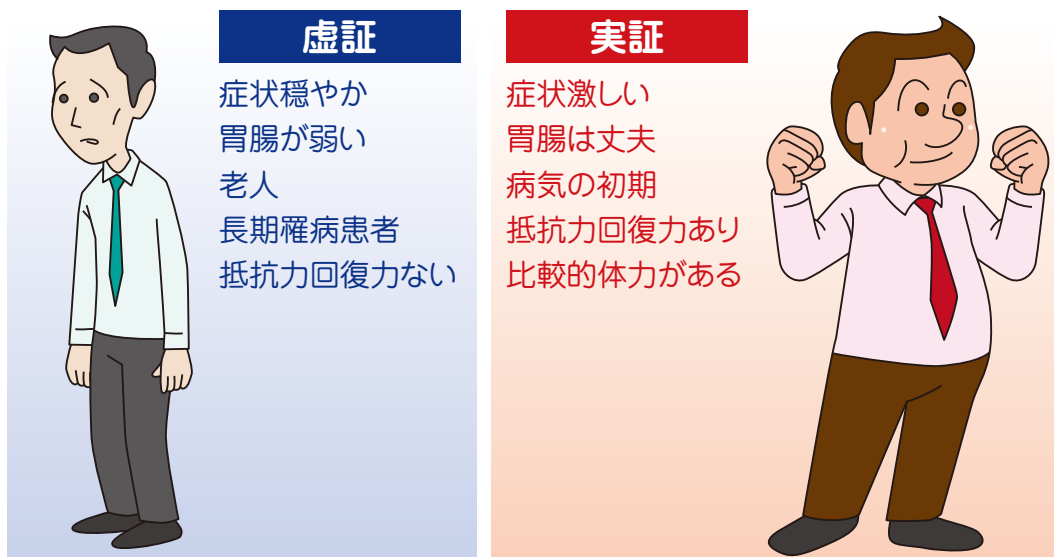


図1 虚証と実証

これらの証を見きわめる上で重要なのが漢方の診察法です。現代医学では軽視されるような所見でも、漢方では貴重な情報となることがしばしばあります。次の項では、この漢方特有の診察法を説明します。動画と対比しながら理解を深めて下さい。

2. 漢方の診察法

漢方には望診，聞診，問診，切診の4つの診察法があり，これらをまとめて「四診（ししん）」と呼びます。

1 望診（ぼうしん）



動画1 望診

現代医学の視診に相当するのが望診ですが、漢方では肉づきや骨格、顔色、皮膚のツヤといった細かい所見も大切にします。診察室に入ってくる時の足どりを見て歩幅が広く力強ければ実証と考え、足が重そうで元気がなければ虚証、顔色が優れず目の下にクマがあれば血虚や瘀血を想定します。

望診の中で、たいへん重要で多くの情報を得られる診察法に「舌診」があります。代表的な舌診所見と漢方的な意義として次のようなものが挙げられます。

①歯圧痕(図2)―水毒

②舌の裏面の静脈怒張(図3)―瘀血

③舌苔―消化機能の低下

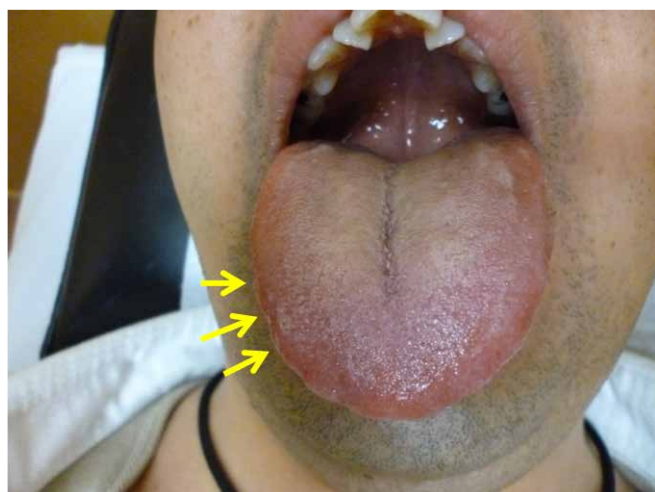


図2 水毒(軽度)

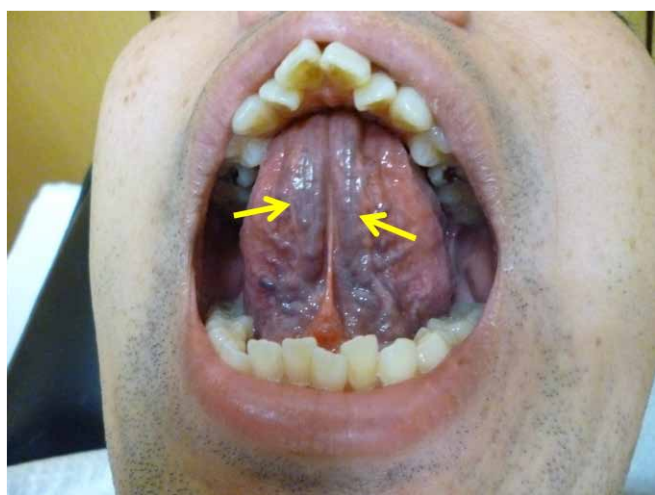


図3 瘀血

2 聞診(ぶんしん)



動画2 聞診

聴覚と嗅覚による診察を聞診と言います。呼吸音や腸蠕動音など現代医学と共通するものもありますが、漢方的な聞診の例として、話す時の声が大きく張りがある場合は実証ととらえ、細く弱々しい声の場合は虚証と考えます。

3 問診(もんしん)



動画3 問診

これは現代医学の問診とほぼ同義ですが、漢方の問診は微細にわたります。現代医学では取り上げられないような徴候が、漢方では診断、処方に至る重要なサインとなることがしばしばあります。

「お腹が冷えるとガスがたまって腸がグルグルと鳴ります」(大建中湯)